

【実践報告】

平成25年度「教育実習Ⅶ（小学校）」の成果と課題

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 村上典章

1 意義と概要

(1) 意義

初等教育学科では、2年次から児童教育コースと幼児教育コースに分かれ、各々の教育について専門的に学び始める。しかし、ほとんどの学生は児童の視点からの出身小学校のイメージしか有していない。そこで、できるだけ早い時期に教師の視点から現在の小学校の実態を把握させるという目的で、2年次6月に観察中心の実習を位置づけている。この実習の意義はおよそ次のとおりである。

- 教育現場での実習体験を通して、自己の適性を判断するとともに教職への意欲を高める。
- 自己紹介文、目標、実習日誌、礼状、事後学習会レジュメ、実習報告書などの添削指導によって、文章表現力を高め、3年次実習へつなげる。
- 毎日の学習会や事後学習会を通して、教育研究の視点や協議のスキルを身につける。
- 宿所での共同生活やグループワークを通して、主体性、協同性を育て、自己の課題に対する早期の取り組みのきっかけとする。
- 事後学習会への参加を通して、1年生は次年度へ見通しをもつ、3、4年生は本実習や教員採用試験への意欲を高めるきっかけとする。

(2) 概要

学生に対しては、次のような形式で概要を示した。

- 1) 目 的 小学校教育の実際にふれ、教職への自覚を高める。
- 2) 目 標 「3つの理解→2つの発見→1つの自覚」

A「学校と教員の仕事について、子どもについて、基本的な指導技術について」の理解を深めることにより、B「教育研究課題、自己」を発見し、C「教職に就くことへの自覚や使命感」を高める。

3) 内 容

A—① 学校と教員の仕事についての理解を深める。

学校では、学校経営、学級経営、学習指導、生徒指導、学校給食、家庭との連携、地域社会との連携など様々な活動が行われている。教育実習を通して学校で行われている様々な活動に関する理解を深め、先生方が日頃行っている教育活動がいかに大変なものかを少しでも実感し、今後の糧としていくことが必要である。そのためには、活動に積極的に参加し、教職員が意識統一して教育に当たることの大切さや、教育環境の整備のあり方、授業外で教員がかかわる仕事の内容などを理解するよう心がけなければならない。

A—② 子どもについての理解を深める。

いろいろな場面で子どもたちと接することになる。授業中、休憩時間など様々な教育活動の場面で子どもたちの様子を把握するよう努力することが大切である。まず、子どもたちの名前を覚えて、一人ひとりのもつ個のよさを見つけ、それぞれの子どもたちの感じ方、見方、行動の違いなどに気づくよう心がけなければならない。また、一人ひとりの子どもと他の子どもたちとの関わりの様子をつか

むことも大切である。子どもたちの豊かな個性や、予想もしないような発想のすばらしさに気づく時、教師の楽しさの一端を味わうことができよう。

A —③ 基本的な指導技術についての理解を深める。

豊かな経験を持つ先生方の指導技術をしっかり観察しよう。具体的には、授業の組み立て、板書のしかた、教科書・資料などの使い方、発問のしかた、教材・教具の使い方、各種教育機器の操作法・活用法、さらには教材研究のしかた、子どもたちへの接し方などである。

B —① 教育研究課題の発見につとめる。

教育実習は、各自が持っていた曖昧な課題を実践を通してより明確にし、その解決に向かって学習する場である。また、新たな教育研究課題を発見する場でもある。そして、その課題は各自が実習期間および実習後に解決するよう努力しなければならないのである。

B —② 自己の発見につとめる。

子どもたちと接する体験などを通して、今までの自分の殻を破り、自分の姿を客観的に見つめ、今まで気づかなかった自己の特性や新たな可能性を知るための貴重な機会である。そこで得られたものは、教育者としての資質や自分の長所・短所などに気づくことにつながり、自分自身を向上させるための努力目標を知ることにもつながる。

C 教育者としての自覚を持つ。

教育実習では、様々な教育活動の体験を通して教員という仕事の魅力に触れるとともに、学校教育の意義、教育を担うことの意味、教職のあり方などについての自覚を深め、教職に就くことへの自覚や使命感を高めていくことが可能である。

- 4) 方 法 観察して理解する。(授業、課外活動、教育環境など)
参加して理解する。(授業への部分的参加、学級活動、環境整備など)
討議して理解する。(宿所での学習会、事後学習会など)
記録して理解する。(実習日誌、実習報告書、事後学習会レジュメなど)

2 今年度の実施要領と主な改善点

(1) 実施要領

- 1) 対 象 初等教育学科2年生(53名)
- 2) 期 間 平成24年6月10日(月)～14日(金)
 * 6月9日(日)に宿所に移動
- 3) 実 習 校 大 朝 町…大朝小学校(10名)・新庄小学校(10名)
 安芸高田市…船佐小学校(4名)・来原小学校(4名)・川根小学校(5名)
 呉市…下蒲刈小学校(8名)
 豊 平 町…豊平小学校(12名)
- 4) 宿 所 大 朝 町…グリーンヒル大朝
 安芸高田市…エコミュージアム川根
 呉市…松寿苑
 豊 平 町…どんぐり荘
- 5) 担当教員 大朝地区……佐伯・(新宅) * ()は主に宿泊指導を担当。
 高宮地区……徳本・(森)
 下蒲刈地区…村上・(今崎)
 豊平地区……川西・(田頭)

- 6) 実習計画 実習校に一任する。但し授業は行わない。部分的参加は可。
- 7) 費用 実習経費 5,000円 生活費 25,000～30,000円
- 8) 組織作り 学習面では学年・学級配属, 生活面では係分担・部屋割など
- 9) 実習要領 パンフレット (学習編は学校単位で, 生活編は宿所単位で作成)
- 10) 事前学習 4月第2週～6月第2週
- 11) 事後学習 6月第4週～7月第4週
- 12) 実施計画

講数 日時	14:50～15:20	15:20～15:50	15:50～16:20	次時への課題
第1講 4/10	出席表, ファイル・手引き 教育実習Ⅶの概要説明 (村上)	地区・実習校の概要説明 (3年生)	地区・実習校の概要説明 (3年生)	先輩から取材
第2講 4/17	ファイル・てびき 実習校決定	実習校決定	実習長, 副実習長, 係決定 所属学年決定 連絡網原稿づくり *引継資料, 封筒	連絡網印刷 (担当)
第3講 4/24	「実習の目的・目標・内容・方法・日課について」 (村上) 「パンフレットについて」 (佐伯)	「実習生としての心構え」 (徳本)	文章講座「自己紹介の書き方」(岡) *5/1提出	自己紹介下書き
第4講 5/1	「子どもとの関わり方について」(今崎)	パンフレット編集作業 *写真	文章講座「目標の書き方」(岡) *5/8提出	各自の目標下書き
第5講 5/8	パンフレット編集作業 *振込用紙	パンフレット編集作業 *印刷の仕方	文章講座「観察・記録のしかた」(岡) *授業記録の取り方	3年生に相談
第6講 5/22	「特別支援教育について」 (今崎)	パンフレット編集作業 *出勤簿, 欠勤届, 講義欠 席届, 健康チェック表	パンフレット編集作業 *寮への提出書類	実習長会議 (事後学習会への取り組み)
第7講 5/29	「学習会と報告書について」 (村上)	パンフレット編集作業	パンフレット完成	パンフレット発送
第8講 6/5	グループ打ち合わせ	事前最終チェック	文章講座「礼状の書き方」 (岡) *分担	3年生に相談
第9講	教 育 実 習 実 施			
第10講 6/19	礼状下書き	報告書準備	報告書準備	礼状下書き確認
第11講 6/26	礼状清書	報告書準備	報告書準備	礼状発送 報告書下書き確認
第12講 7/3	報告書完成	事後学習会準備	事後学習会準備	事後学習会レ ジュメ印刷
第13講 7/10	事後学習会 (個人発表, 討論) *実習長を中心に早めに計画, 連絡する。			報告書発送 (実 習校, 教委)
第14講 7/12	事後学習会 (テーマ別討論), 学習のまとめ *他学年にも公開			
第15講 7/24	教育実習Ⅱ・Ⅲ内諾説明会			

(2) 主な改善点

① 3年生との交流の機会を増やす。

従来、3年生は地区・実習校の概要説明のみであったが、昨年度の調査の結果、「実習間近になって質問事項が増えたので、交流の機会を増やしてほしい」という要望が多かった。そこで、今年度はパンフレット作成時と実習直前に設定し、適宜連絡を取り合う体制を組んだ。

② 学習会レジュメと実習報告書を分け、実習報告書の内容を精選する。

従来、事後学習会レジュメを実習報告書として関係機関に送付してきた。しかし、専門的な講義を受けていない段階の学生の文章であるため、学外に出すためには綿密なチェックと修正が必要であった。そのため、送付時期が遅れることとなった。そこで、今年度は実習報告書をレジュメと分け、「実習を終えて」と「自己の課題」を中心の内容にした。

3 成果と課題

(1) 成果

1) 目標に関しては、ほぼ達成することができた。内容毎に報告書の典型例を抜粋し、記す。

A—① 教員の仕事についての理解が深まった。

- ・教師という仕事は想像以上の忙しさであった。先生方は休憩時間も課題の添削や授業準備などをされていた。放課後は教室の片付けや掲示物の貼りつけなどである。先生の話によると、教材研究などを含めると、帰るのが20時過ぎになることもあるので、教師を続けていくには家族の理解と協力が必要なのだそうだ。教師の大変さがここまでとは思わなかった。「本当はもっとゆとりをもって子どもたちと遊んであげたいのだけだね。」という先生の言葉から、苦労が伝わってきた。たしかに、どれも大切な仕事だが、一番はきちんと子どもと向き合い、子どもたちのことを知ることだと思う。効率的に済ませて、児童と一緒に時間を作りたい。

A—② 子どもについての理解が深まった。

- ・小学校5年生の実態を知ることができた。私が思っていたより活発で純粋な子が多いと感じた。小学校高学年は思春期に入るというイメージを持っており、実習に行く前はうまくコミュニケーションが取れるか心配だった。しかし、初日の最初の休み時間からたくさんの児童が集まってくれた。思春期で難しいというイメージはなくなった。だが、よく観察していると、話しかけるまでに2、3日かかった子や一週間経ってもそっけない子もいた。そこで、私は児童のペースに流されずみんな平等に対応することが大切なのではないかと感じた。

A—③ 基本的な指導技術についての理解が深まった。

- ・授業の組み立て方や板書の仕方、児童の興味関心が湧くように工夫された発問、分かりやすい話し方なども学ぶことができた。授業観察を通して、児童に考えさせ、主体的に取り組ませることの大切さを学んだ。他教科との関連を図られた指導、リズムを用いた指導もされていた。先生は、児童が説明の途中に質問したときは、その都度答えるのではなく、待つことを教えられていた。先生は、児童が人を傷つけることをしたときは、厳しく指導されていた。良いときは、その場ですかさず褒められていた。このような指導が大切だと考えた。

B—① 教育研究課題を発見した学生もいた。

- ・(複式学級) 今、少子化が進む中、地方では複式学級を設けたり複数の学校を統廃合したりする動きが見られる。複式学級ではどうしても授業中に先生がいらないという状況が起こってしまう。こうした状況が子どもたちの学力にどこまで影響するのかはわからないが、できることならば今よりも多くの同級生と単式学級で学ばせてあげたいと思った。しかし、学校を統廃合することで

出身校を失う子どもも出てくると考えると難しい問題だと改めて考えさせられた。こうした問題について、これからより詳しいことを調べ、どうあるべきなのか自分の考えをもち、教師になったとき私に何ができるのか考えていきたい。

- ・(特別支援学級) 私は今までに特別支援学級でどんな活動をしているのかを知らなかった。今回、特別支援学級の授業に参加させていただき、児童の様子や先生の言葉かけ、授業の工夫などを間近で見ることができた。しかし、実際に児童と接することはできなかった。正直、接し方がわからないという思いもあった。もっとたくさんの知識を身につけ、児童について理解し、その児童に合った言葉かけや対応ができるようになりたい。そして、児童にも特別支援学級について理解できるような指導をしなければならない。自分自身が学ぶだけでなく、それを児童にうまく伝えられるような力もつけたい。
- ・(給食時間) 当番の子が手際よく準備をする速さに驚いた。でも一番びっくりしたのは食べる時間が短いことだ。だいたい10分くらいで食べられなかったら昼休憩まで持ち越しという形になっていた。児童は味わって食べるというより急いで食べるという感じだった。この先、よく噛み味わって食べられるくらいのゆとりができてほしいと思った。

B —② 自己の課題を明確にし、具体的に取り組もうとしている。

- ・(体力) まず体力をつけることだ。授業観察のとき、45分立っているだけで足が痛くなった。鬼ごっこをしたりプール掃除をしたりして、いたるところが筋肉痛になり、実習後に体調を崩してしまった。きちんと毎日3食食べ、十分な睡眠をとらなければ、よい授業をすることもできない。規則正しい生活を心がけるとともに、ウォーキング等の身近なことから始めて体力をつけたい。
- ・(コミュニケーション能力) まずは人前であがらずに話ができる力をつけたい。自己紹介や最後の挨拶をした時に児童の前で話すことがあったが、考えがまとまらなかったり言葉に詰まったりして、うまく話ができなかった。この実習をきっかけに、携帯に頼らず直接相手に伝える努力をしていきたい。
- ・(授業力) 苦手教科の克服である。小学校は基本的に学級担任制になっているので、全教科の授業をしなければならない。しかし、得意な教科と不得意な教科で差がある今の状態では、子どもたちに授業することは難しい。得意な教科はよりわかりやすくおもしろく、苦手な教科は自信を持って教えることができるように、最低限度の知識を身につけていきたい。
- ・(食事) 今後の課題は、野菜嫌いを克服することである。実習中も給食に野菜が毎日出て苦しんだ。しかし、子どもたちの視線があるため何とか完食することができた。「先生、ほくも苦手な牛乳を飲むのだから先生も残してはいけないよ。」と子どもから言われ、すごく恥ずかしかった。だから、私は実習から帰ってきてからできるだけ野菜を口にしている。
- ・(大学の講義) 実際に教育現場に入ること、大学で学んでいる講義の意味や大切さを感じた。ただ漫然と毎日の授業を受けていたが、実習を終え、学んだことを実際の教育現場で生かすことができるようにしなければならないという意識をもつようになった。行動に移すことができるように努力したい。

C 自己の適性について考え、教職への意欲が高まった。

- ・高校の時、地元の小学校で1日体験をした。私は子どもとの関わり方がわからず、遠くから様子を伺うしかなかった。また同じ状況になるのではと、実習前は不安でたまらなかった。しかし、今回は自然と児童とコミュニケーションをとることができ、自分でも驚いた。これは、大学に入ってから授業やボランティアを通して子どもとの関わり方を学んでいるからだと思う。教師に憧れていたが、高校の失敗体験から自分は教師に向いていないと思うことがしばしばあった。しかし、今回、もうあの頃の自分ではなく、着実に教師に近づいていると感じることができた。きらきらした目の子どもたちを見ていると、やはり自分は教師になりたいのだと強く感じた。子どもたちを見守りながら共に成長していける教師になりたい。

- 2) 実習校との長期にわたる連携により、講話、全学級参観、校内研修会への参加など、実習内容が年々充実してきている。
- 3) 今年度、3年生との交流を密にしたことにより、グループワークが円滑に進んだ。
- 4) 今年度、実習報告書の内容を精選したことにより、関係機関に早期に送付できた。

(2) 課題

実習後及び次年度の課題として次のものが考えられる。

- 体調不良により、途中参加1名、中止1名が出た。健康管理に対する意識を高めていく。
- 実習をしたことによって、自己の適性、能力などに不安を抱いた学生が数名いる。適性の把握と伸長、能力の開発に向けて継続的に支援していく。
- 事後学習会への他学年の参加が少なかった。事後調査の結果、1年生は「予定変更できなかった32%、日時を知らなかった23%、講義と重なった21%、参加しようと思わなかった21%」であり、3年生は「日時を知らなかった42%、予定変更できなかった17%、自分の模擬授業で忙しかった14%」などであった。日程の早期決定と広報の徹底、参加意識の啓蒙に努める。
- 実行委員会が独断で動いてミスが出たり、3年生から若干安易な情報が流れたりしたケースがあった。担当教員への報告を徹底させ、適切な支援を行っていく。
- 集中講義科目としてコマ数が減る可能性がある。パンフレット作成や事後学習を自主活動とするなどの方法で対応していく。
- 実習後のスケジュールが過密なので、早めに計画し、見通しを持って活動させる。
- 次年度は予算執行方法の変更や宿泊費値上げなどがあるため、ミスなく対応していく。